

第3セッション

司会 それでは、午後の第2セッション、全体での第3セッションを始めさせていただきたいと思います。午後の第2セッションにつきましては

藤田先生が座長を務められます。では藤田先生、よろしくお願いいたします。

9. 「東亜同文書院の中国方面の研究に関する概要」

欧 七 斤

藤田 もう一度舞台に上げていただきました。最後、お二人の発表が残っています。最初に中国側の欧先生から、中国側における書院の研究動向です。最後に日本側、武井先生のほうから、日本側ではそれをどういうふうの研究動向として分析できるか。中国側と日本側とセットで最後のところにプログラムを組ませていただきました。まず「東亜同文書院の中国方面の研究に関する概要」ということで、欧七斤先生よりお願いいたします。

欧 ご来席の学者の皆様、ご来賓の皆様、こんにちは。私は中国側から見た東亜同文書院の研究の現状についてご紹介申し上げたいと思います。三つに分かれていまして、第1に1900～1945年までの同文書院の存在期間、中国の政界、学会の人々の同文書院に対する見方。第2に1960年代から90年代までの同文書院当事者の回顧録。第3に90年代の中国の学者の専門の研究論文について触れてみたいと思います。

まず第一の部分は、政界、学会、社会の媒体の見方ですが、1900年に同文書院ができてから、1931年に九一八事変、満州事変が勃発するまで、中国政府、政界、社会、学会の多くの人々が同文書院およびその主催者である東亜同文会に対して比較的よい関係を保っていました。康有為、梁啓超、孫中山といった人々は、書院ならびに東亜同文会と特殊な関係を保っていました。

1899年の百日維新が失敗したあと、康有為、梁啓超は日本に亡命し、東亜同文会の会長、近衛

篤磨らと密接な関係を保ちました。中国革命の先行者である孫中山先生も、近衛篤磨親子など主要な人物と会っております。また、多くの中核メンバー、たとえば山田純三郎、犬養毅、平山周らと友好的な往来を持っています。山田純三郎らは孫中山の革命事業の支持者でもありました。この面については、午前中、馬場先生からのレポートを聞いております。

同文書院ができた過程において、清末の多くの人々の支持を受けています。東亜同文会については、李鴻章、劉坤一、張之洞らが同意を表明しておりますし、同文書院の誕生に便宜を提供しています。北洋政府、南京政府におきまして、中国当局は同文書院に対して一定の支持を与えております。

1920年7月、北京政府は同文書院の中華学生部の設立に同意しています。また、旅行調査にあたっては旅行許可証を出しておりますし、地方の会員に対してもその保護を要請しています。こういった協力は1932年に終わっています。

中国の政界、学会の人々は同文書院においていろいろな活動に参加したり、講演を行ったりしています。1900年には劉坤一、張之洞が代表を派遣して開院式に参加しています。当時、中国最大の実業家で、交通大学の創始者である盛宣懷もその会に参加しています。1917年、中国側の官民の代表である朱兆莘らが虹橋路校舎の落成式典に参加しています。1930年5月、国民政府の孔祥熙、孫科らが、同文書院30周年の式典に参加するた

めにやってきた近衛文麿らを招いて宴会を催しています。1935～37年の間、上海市の市長、呉鉄城は3年連続して書院の卒業式に参加しています。ほかにも、魯迅、胡適、章士釗といった文化界の有名な人々も相次いで同文書院で講演を行っています。魯迅は「無頼漢と文学」というタイトルで講演を行っています。歴代政府の多くの人々も同文書院と良好な関係を保っています。

しかし、中国の民間および一部の人々は学園の存在に憂慮を表明しています。1904年の日露戦争のとき、ある人がイギリスの記者に「これはドイツのフランスに対する歴史の再現であり、1870年の戦争のように、ドイツ人のフランス軍に対する知識はフランス人を超えている。今日、日本の中国に対するもまた然り」ということを述べています。1931年に九一八事変が発生すると、中華部学生は同文書院に対して中国の危機を指摘し、「同文書院の中国におけるは、東インド会社のインドにおけるごとし」と指摘しています。

1936年、王古魯が『最近日本人の中国研究に関する一般』という書を出しました。これは中国で最も早く現れた同文書院に関する著作ですが、その中で、同文書院の目的は、日本人がいうところの支那通を養成するものであり、支那研究部は同文書院の重要性について、支那研究が同文会の最も重要な事業であると指摘しています。

続きまして二点目です。1960年代の回顧録です。1960年代初めから始まって、中国の関係の人々は、当事者の回顧録を記録して、大量の資料を出しています。中に何本か同文書院関係の回顧資料も含まれています。それらは63年に出的吉宜康の「東亜同文書院について」、66年の李劍農の「私が知る東亜同文書院」、85年に曹芸が発表した「九一八の大砲は東亜同文書院の弔いの鐘を鳴らした」、90年の蔡茂棠の「東亜同文書院に関する断片」といった文章です。

それらは、同文書院の学生、中華部の学生、あるいは仕事をしていた職員の人たちです。東亜同

文書院は東亜同文会の経営であったかもしれないが、実際には外務省の管轄で、特殊な使命を持った文化機構であったという論説です。そして、中国経済を突っ込んで研究すると同時に、中国侵略における経済面での人材を養成していた。旅行調査が重視されていた。そして、幅広く中国に関する資料を集めたことにもそれなりの目的があったと述べています。

回顧録の作者は大部分が中華学生部の学生で、入学の資格、入校後の待遇、日本への旅行、中華学生部が取り消された原因などについて、非常に細かく回顧しています。これが中華学生部の学生の状況を理解する最も一次的な資料です。

続きまして三点目は、中国の学者の専門の研究の状況です。最初に同文書院を学術問題として取り上げたのは、中国台湾の学者、黄福慶でした。76年6月に発表した文章で「東亜同文会 日本の中国における文教活動の一」というものです。95年に本日ご在席の蘇智良教授も「上海東亜同文書院論述」という文を発表しています。東亜同文会と同文書院の発展の歴史、歴史的な位置づけや役割について論述しています。厳密に申しますと、これが大陸において公に発表された東亜同文書院に関する最初の専門的論文といえることができます。

その後、歴史学者を主として、研究者たちが一連の専門的な研究論文を発表しています。主たるものとして、97年に単冠初が「東亜同文書院の政治的特徴を論ずる、併せて西洋の在中国教会大学との比較」を発表しています。98年に房建昌が発表した「上海東亜同文書院大学档案の発見と価値」、2000年に馮天瑜が発表した「東亜同文書院の中国旅行調査概論」、2002年に趙文遠が発表した「上海同文書院と近代日本の中国侵略活動」、2004年に周徳喜が発表した「同文書院始末記」、ほかにも同文会、同文書院関係の文書があります。これらの文書は、同文会、同文書院の教学の性質、中日政府間の関係、旅行調査、教学活動、中華系

の学生など、一連の問題についての初歩的な検討を行っております。

それらについてそれぞれ述べてみます。まず東亜同文会について。これらの著者たちは、同文書院の創立者である東亜同文会は、政治的な特性を持った団体であったと認めています。単冠初は、日本政府の意の下に資金援助を受けてつくられた半官半民の政治団体であったと述べています。趙文遠も、日本の大陸侵略と関連があると言っています。同時に黄福慶は、同文会は政治化された背景を持っており、日本政府の策略に合わせた民間団体というふうに論じています。

第二に同文書院の性質ならびに歴史的な位置づけです。蘇智良、周徳喜らの人々は、同文書院が日本の中国侵略の国策に奉仕したと同時に、卒業生の進歩的な役割にも触れています。最も典型的な評価は蘇智良教授のもので、今日午前中のお話にもありましたとおり、同文書院の歴史的な位置づけおよびその役割について比較的細かい評価をしていて、同文書院が一部歴史的に進歩的な役割を果たしたことも肯定しています。たとえば日本の中国研究の権威ある機構として生まれ、日本近代中国学の基礎を打ち立てたこと、中日両国人民文化交流、友好関係の発展に寄与したこと、また、一部の教師、学生が中国の革命事業に参加したこと、大旅行調査が形成した数千の報告書は、今日においても近代中国社会を研究する大切な資料であること。

同時に蘇教授は、一定程度において日本の侵略政策に奉仕したことも指摘しています。たとえば大部分の卒業生は、直接日本政府あるいは軍に協力しています。また、旅行調査も政治的な色彩があったとしています。蘇教授はさらに、同文書院の前後の時期における性質上の変化も指摘しています。つまり、同文書院は後になると、建学の初志とは違って、善隣平和から戦争に奉仕するものになっていることを指摘しています。

また、日本の官や中国との朝野との関係ですが、

中日戦争が勃発する以前、同文書院と中国政府は比較的よい関係を保っていました。日本の官とも特殊な関係を保っていました。長期にわたって官の支持を得ていました。たとえば馮天瑜は同文書院と日本政府の間の大陸政策の関連に触れています。日本の文部省、外務省の二重の管理の下にあり、後には直接首相府の管制を受けていたと指摘しています。半世紀近くの学校の歴史の中で、必然的に日本の官の対中政策の制約や影響を受けている。しかも、その間の日中関係にもいろいろ絡まっている。特に中日戦争の期間においてはそうであると指摘しています。

中国の朝野との関係では、単冠初のお考えでは、書院ができた当初から抗日戦争が勃発するまで、中国の朝野、特に官は同文書院に対してかなり友好的な態度を持っていました。特に中国の歴代の政府は、同文書院の創設、経営、発展に対して多くの協力を提供しています。また、中国の多くの著名者、政界の余人も学院と密接な往来を保っていました。

第四点目は旅行調査です。これに対する評価として、馮天瑜のお考え方では、大旅行は社会調査を重視しており、それによって得た一次資料は日本の中国学の特徴であると指摘しています。また、大旅行調査は不可避免的に日本の大陸政策の烙印を押されていたとも指摘していますが、同時に、異なった時期においてそれぞれ異なった性質を持っているので具体的な分析をしなければならないと言っています。また、どういう目的であろうと、調査が半世紀近くにわたって行われたこと、その範囲もチベットを除く中国のあらゆる地域に及んでいること、調査の対象も非常に細かく分かれていること、そういう意味で多くの一次資料が集められたこと、これが清末から民国初期に関する経済・政治・社会・風俗・文化などいろいろな文益の研究に貴重な資料を提供していることを指摘しています。これは、藤田先生や孫先生も指摘されていたことですが、調査の方法、材料を整理する

方法もわれわれが参考にするに値するものがあります。

多くの論者が大旅行調査に触れておりまして、その基本的な観点は馮天瑜に近いものがあります。たとえば蘇智良先生は、政治的な色彩を指摘すると同時に、日本の参謀本部や外務省などが報告書から多くの情報を得たということも指摘しています。また、これらの大規模な社会調査、その広さ、深さは、中国の歴代の政府が行った中国自身の調査を上回っているとも指摘しています。つまり、この良好調査の実地的な記録は、当時の中国を客観的に理解するうえで非常に貴重な文化的遺産になっていることも指摘しているわけです。

第五点目は教学活動です。こうした論文の筆者は、同文書院の漢語の教育、社会の実践、商業教育といった面で教育実践を肯定しています。黄福慶も、特に中国の語文の訓練、中国の情勢に関する教育を重視していたということを強調しています。蘇智良先生も中国語の教育について肯定し、外国が行っていた学校として同文書院の中国語教育の正確さ、精密さは今日まで右に出るものはないと指摘しています。単冠初は、同文書院の教学の特徴を簡単に指摘しており、商学を重視し、商科を主として、中国の大陸において最も早い近代的な意義を持った高等教育機関だったと指摘しています。

中華学生部について触れているのは趙文遠だけです。彼の考えでは、中華学生部がつくられた大きな原因は、学生を受け入れることによって中日間の感情をつなげ、反日の情緒を抑えようということです。それから、西方の列強と中国における教育権を争うことでした。しかし、軍閥割拠の中で学生を集めるのはなかなか難しく、20年代に起こった教育権を取り戻そうという運動もあって、中華学生部の経営はなかなかうまく行われませんでした。

同文書院の研究は、長期間にわたって日本に集中しておりました。著作、回顧録も非常にたくさ

ん存在しています。それに比べて、中国の学術界の同文書院に対する研究は、これまで十分重視されず、資料も十分に集められておりませんでした。研究はまだ初歩的な段階にあります。研究の成果も多くありません。しかも、マクロ的なレベルにとどまっていて、今後の進化が望まれます。

私の考えでは、中国の学術界がこれらを突破して、同文書院の研究を深めていくためには以下の点に注意すべきであると思っています。まず同文書院史の研究を重視すること。同文書院およびその創始者たち、東亜同文会が歴史の中で果たした重要な役割を肯定すべきですし、同文書院の研究が中日両国の文化交流における経験を総括し、今後の両国間の文化交流活動に役立てるべきです。

第二に、幅広く資料を収集すべきでしょう。同文書院の資料が中国において十分でないということがボトルネックです。今後資料を収集することが一つのブレイクスルーになるでしょう。そして、魯迅がいう「持ってこい主義」で、日本側からの資料もできるだけいただくことが必要でしょう。また、中国国内の各図書館、档案馆にある資料をできるだけ調べるべきでしょう。

第三に、日本側との交流、協力を深めるべきです。中国側は日本側との交流を強化して、課題研究を共同して進めること。それによって、中国学術界の同文書院研究を深めていきたいと望んでおります。以上です。ありがとうございました。(拍手)

藤田 どうもありがとうございました。これまでの中国側の書院研究を時代の中で、あるいはその項目ごとに整理していただきました。全体としてはまだこれからというお話だったと思います。資料等の問題があるということだとは思いますが、何かご質問はございますか。事実関係等で何かありますか。よろしいでしょうか。そうしたら、このあとの全体の討論でまたお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。